

金沢大学 正員 松浦義満
同 学生員・小森明文

1. はじめに

観光交通は他の一般交通、例えば通勤・通学交通とは異なり、人間の趣味・嗜好といふに極めて捉え難い要因がその発生要因となっているために、観光交通の現況の把握、更に将来予測を行なう場合、そこには多くの問題点がある。また観光交通の場合、現況の諸調査が十分に行なわれておらず資料の面からの制約もかなりあると思われる。

一般に、観光需要・観光活動を分析する場合、次の3つの側面から考える必要がある。つまり (i) 観光客発地の条件 (ii) 観光地の観光資源等の条件 (iii) 発地・観光地を結ぶ交通条件 である。ここでは観光誘引力という考えを導入し、この観光誘引力が上記の3条件の“関数”であり、かつ (観光需要) $\propto$ (観光誘引力) という前提を立て、これを満足するような“関数”-観光誘引力を導こうというものである。

2. 観光需要分析の手順

観光需要分析の手順は次のように行なう。 Step 1. 観光資源の選択 Step 2. 年齢別観光魅力評価値の算定 Step 3. 観光誘引力の(推定)定義 Step 4. 観光資源別・観光客年齢別の観光誘引力の算出 Step 5. 観光誘引力と入込観光客数との関係を分析

なお本報告では、Step 1, Step 2 について検討を行なう。

3. 観光資源の選択

観光資源としては大きく自然資源(山岳・高原、峡谷、温泉等)、人文資源(史跡、社寺、公園等)、観光対象施設(産業・生活施設等)に分けて考えられぬが、ここでは観光資源として次の3資源を用いる。

(i) 自然公園(公園面積) (ii) 文化財(件数) (iii) 温泉(湧出量)
昭和43年度の資料をもとに全国9地域について上記の観光資源量とその地域の入込観光客数との関係を示したものが右の図1-1, 1-2, 1-3であり、また入込観光客数(Y)と自然公園(X_1)、文化財(X_2)、温泉(X_3)との関係を線形回帰した結果が(1), (2)式である。

$$(1) \quad Y = aX_1 + bX_2 + cX_3$$

$$(2) \quad Y = 1.2382 X_1 + 1.3122 X_2 + 1.9555 X_3$$

$$Y \text{ と } X_1 \text{ の偏相関係数} : r_1 = 0.59949$$

$$Y \text{ と } X_2 \text{ の } : r_2 = 0.75938$$

$$Y \text{ と } X_3 \text{ の } : r_3 = 0.72229$$

$$Y \text{ と } X \text{ の重相関係数} : R = 0.75992$$

図1-1 自然公園と入込観光客数

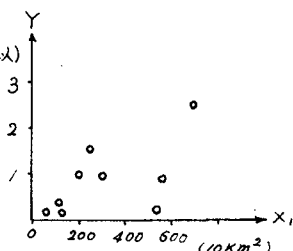


図1-2 文化財と入込観光客数

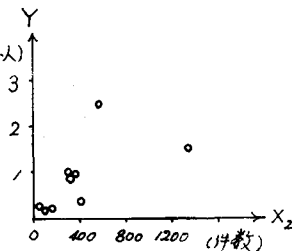
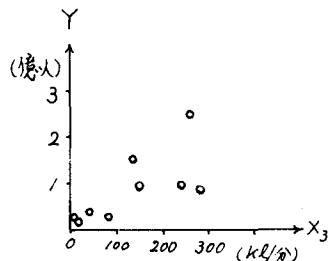


図1-3 温泉と入込観光客数



4. 観光地における観光客の年齢構成及び年齢別々の魅力評価

北陸の観光地域のうち観光資源の内容がはっきりしている3地域、立山・黒部地域(自然公園、特に山岳・高原性)、能登地域(同じく海洋性)、金沢・加賀地域(文化財及び温泉資源)を対象に、これらの地域の観光客の年齢状況を調べ、これを5才間隔に集計した結果が右の図-2(図2-1、2-2、2-3)に示されている。

図-2より、観光資源の内容の相違により各年齢別の観光資源に与える魅力評価が異なり、しかも同一年齢別の各観光資源に与える魅力評価値は毎年ほぼ一定していることが判断される。これをもとに、今活動年齢を0～69才とみなし、これを0～19、20～29、30～39、40～49、50～69才の5段階に分け、この各年齢別の各の3観光資源に与える魅力評価値を求める。

ここでは昭和41年から42年にかけて行われた第2回全国旅行動態調査の結果を用いる。算出方法は、まず旅行目的を保健・レクリエーションに限定し、その活動実数を年齢別に分ける。(表-1参照)各年齢別に対し特に先の3観光資源がその誘引力となっていると考えられる活動実数を選び出し、その構成比を各年齢別の与える魅力評価値とみなす。(表-2参照)

5. 結果及び検討

観光資源の内容がはっきりしている観光地の観光客年齢構成が毎年ほぼ一定しているという事実注目し、これより年齢別の魅力評価値、観光誘引力の決定、そして最終的には年齢別の観光需要を分析しようというのが本研究の主なねらいである。この場合、年齢によって観光客がどのような内容の観光資源に最も引付けられるのかを調べたり、各観光資源に与える魅力評価値を算定したりすることは極めてむずかしい。ここでは、全国的に行われた旅行動態調査の結果を用いたが、この算定方法については更にこれからの研究課題としたい。なおこの調査・分析は総理府(中部国整備本部)依託による、「北陸の総合交通体系」の調査・分析の一貫として行われたものである。

図2-1 立山・黒部地域

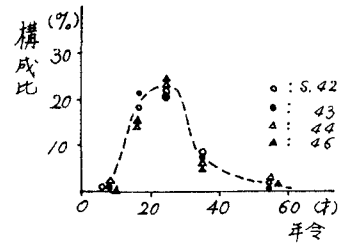


図2-2 能登地域

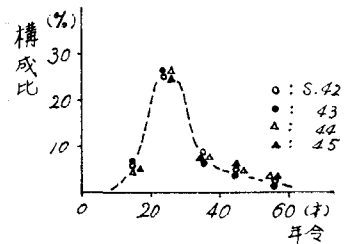


図2-3 金沢・加賀地域

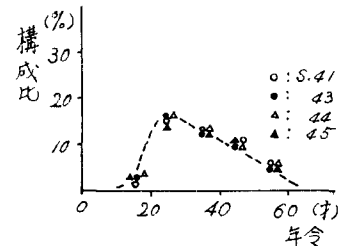


表-1 旅行動態調査における保健・レクリエーション旅行

活動年齢	実数	登山・ハイキング・キャンプ	海水浴・ヨット・マリンスポーツ	見物・見学	湯治・保養	避暑・避寒	手土産詣
0～15才	697	42	183	256	186	36	14
16～21	649	114	132	295	77	21	10
22～29	817	117	73	439	170	8	10
30～39	993	18	115	495	310	20	35
40～49	965	13	71	527	283	16	55
50～59	961	10	24	551	306	6	64
60才以上	900	0	10	486	278	10	116

表-2 観光資源別魅力評価値

年齢別観光資源	0～19才	20～29	30～39	40～49	50～69
自然公園	0.357	0.238	0.142	0.094	0.026
文化財	0.435	0.549	0.527	0.589	0.623
温泉	0.208	0.213	0.331	0.317	0.351
	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000